

登校拒否児(者)の親の相互援助グループに 関する文献展望

川 中 淳 子

目 次

はじめに

1. 登校拒否児(者)の親の相互援助グループに関してのこれまでの報告
 - (1) 専門家によるグループの実践報告
 - 1) 1960年代以前
 - 2) 1970年代
 - 3) 1980年代
 - 4) 1990年代以降
 - (2) 父母による相互援助グループの実践報告
 - (3) 理論的考察に主眼をおいた研究報告
2. 考察
 - (1) 親グループの報告の変遷
 - (2) 親グループ及び先行研究の意義と問題点
 - (3) 親グループの研究の今後の方向性

はじめに

登校拒否に関する研究は、1940年にアメリカで Johnson, A. M., Eugene, I. F., Szurek, S. A., & Margaret, S. が、何らかの心理的なメカニズムにより学校に行けなくなっている子供達を、「学校恐怖症」として報告したのが最初である。日本では、第2次世界大戦後から登校拒否は問題となりはじめ、1959年に佐藤が日本ではじめてのまとまった論文を提出した。この報告から40年以上もの歳月が経ち、登校拒否状態となっている児童・生徒数は増加の一途をたどり、今日では登校拒否は社会的に広く知られる問題となっている。それと並行して、研究報告も増加し続け、その数は1000以上にもなり、様々な観点からの研究がなされている。登校拒否の成因については、本人のパーソナリティ、家族関係、学校や社会の状況など様々なレベルでの議論がある。従って援助のあり方も、その立場によっていずれかのレベルに重点を置いたものとなる。

さて、登校拒否は、児童期・思春期の成長発達上の問題であり、決して疾病ではない。こういう状態となった子どもの成長発達を長期にわたって見守るのは、子供にとって最も身近な存在の親である。子どもが登校拒否状態となった時には、親こそが最も良き理解者となることが望まれる。

だが、子どもが登校拒否状態となった親たちの不安や苦悩は大きい。自責的になったり、焦ったりする。同じような苦悩を抱えた人と身近なところで出会うのは困難であり、孤立感を抱く場合も多い。子どもを理解していこうとの余裕を持つことが困難となることも多い。また、登校拒否をしている子供について考えていくためには、一人で考えるよりも、同じような立場の人からのアドバイスを得ながら考える方が、取り組みやすい場合が多い。そのための、親たちがお互いに学びあい支え合う場として、親の相互援助グループ(以下グループと記す)が各地で行われており、その援助的・相互支持的な効果は大きいようだ。

親のグループについては、学会発表がなされたり、論文が提出されたり、種々の書籍で記されたり、グループの活動内容や特長や意義・効果について言及されていることが多い。そこで、本論文では、登校拒否児の親のグループについての文献を展望し、その意義や研究の変遷とその背景、及び、今後の方向性について検討することを目的とする。尚、文献による報告はなされていない、ある1グループについては、グループの代表者からグループの実践について聴取した結果を記している。

1. これまでの報告について

(1) 専門家によるグループの実践報告

これらのグループについては表1にまとめるとともに、年代毎の特徴を以下に記す。

1) 1960年代以前

この時期のグループの報告は、真下(1967)によるものがある。これは、真下が勤務する病院で登校拒否により子どもが入院をしている親を対象にしたグループである。親への個別指導に併設して行なわれている。具体的な実践方法の記載はないが、会の中では母親の子どもに対する配慮が語られることが多かったようだ。回を重ねるにつれ、子どもに対する見方や、接触方法の改善が見られるようになったようである。尚、この時期は、この他には親のグループの報告は見当たらなかった。

2) 1970年代

この時期の報告も多くはない。そのうちの一つは山崎・井元(1971)による子どもの集団療法と並行する形での親のグループの報告がある。これは、登校拒否の小学生女子5名を対象に実施されていた集団遊戯療法と並行して、母親の話し合い集団が持たれたというものである。スタッフ側の人員の限界により、専任のリーダーが終始同席することは不可能であった。このグループは、「子どもに関係して親の日常機能を改善することがその目標であり、その狙いは子どもの感情を親が鋭敏に感じとれるようになることであり、子どもの行動の奥底にある意味の理解を深めることである」というものである。「これらの自由な話し合いのセッションは、共通の悩みを体験している母親らにとって、積極的な相互の心理的な支持の場になり得たし、また登校拒否の発症の動機やその経過、その取り扱いの話し合いにより他の母親から多くを学習したことが語られた」という。また、回を重ねるうちに、子どもの養育への反省も語られるようになってきたようである。自由な話し合いの場が、親の支えとなったようだ。

また、光岡(1976)の報告では、対象者はある相談機関を利用している登校拒否の高校生の親であり、実施者によりその対象者はある程度選ばれていた。

3)1980年代

親のグループに関する報告が増加した。この時期には、自由討論が中心で参加者の自発性が重視されているグループの報告が多い。また、親やグループの変化過程について言及している論文も見られ始めた。

安部（1984）や米良（1985、1986）は、積極的な方向付けはせずに自由討論のグループを行っている。安部（1984）は、グループ・アプローチの意義として、「親の仲間体験」を指摘し、「親の訴えを無理なく受け止め得るのは、同じ悩みをもった親であり、グループに参加することで、親たちは悩みを分け持ってくれる仲間を発見する。仲間の発見により、親たちは心の余裕をとり戻す」と述べている。

自由討論を中心としたグループの中で、討論の初期の段階で、スタッフが討論の方向付けをする場合もある。藤沢（1985）は、オープン・システムで行っているが、対象者がグループに入る前に、①苦悩・不安の共有、②問題解決方法の共同探索、③親自身の変容について、説明をしている。これらの報告では、（母）親自身の精神的安定や、親同士で支え合ったり情報を交換したりという意義が認められている。

他にも、専門家が方向付けを行なっているグループの報告も見られる。星野（1988）の報告によるグループは、医師が司会役をやり、家族の出席者全員が子供に関する悩みや疑問点などについて発表し、スタッフとして参加している精神科医、心理療法士、教師、看護婦等の、専門職従事者や、メンバーである他の家族がそれに対して適切な助言を与えるという形式である。スタッフについては、「教師との協力体制のつくり方を知ってもらうには、教育関係者に出席してもらうことは不可欠」と述べている。そして本報告のグループの経験から、家族がグループに出席することによって心理的に変容していく場合、①「困惑期」（子供の不登校や問題行動にふりまわされて不安や心配の強い段階）、②「学習期」（登校拒否について、子供との接し方、教師との連携の仕方等について学習する段階）、③「洞察期」（家族が自分たちの接し方、しつけ方の誤りに気づく段階）、④「行動期」（家族が適切に子供に働きかけて良好な親子関係を築く段階）の四つの段階が見られることを指摘している。そして、両親がグループで洞察を深めていくことができるのは、専門家の話のみならず、家族同士の“治療的相互作用”が重要であることを示唆している。

専門家が家族療法でのスキル・トレーニングを応用し、参加者が種々のプログラムの体験や、子どもへの対応の具体的方法を学ぶというものがある。堀之内（1985）が報告するグループは、家族療法のスキル・トレーニングを応用して実施された。対象者は両親（単親を含む）である。堀之内は、親の問題として、1）親の知識不足、2）対応するスキルの不足、3）その場での自分の気づき・共感性の不足、4）親自身の経験の問題、の四つをあげ、それに見合ったプログラムを用意し、提供するという考えのもとで、親の会を行った。親の過去経験については、個別の面接の場で、具体的対応方法についてはグループで取り上げるようにしていた。グループ内では、自己紹介、相手との対応についての体験学習（呼吸を合わせる、能動的聴き方、ロールプレイ）、家族や自分を知るための心理学的テスト（家族絵画）、自分・配偶者への期待水準への気づきのための記述と話し合い、簡易家族評価尺度の実施、種々の家族参加のレクリエーション等のプログラムを用意し実施していた。ここでは、自己紹介一つをとっても、コミュニケーションの能力向上のためのトレーニングとして考えられている。この会の意義としては、参加メンバーは種々のプロ

グラムの体験や、それをとおして子供への対応の具体的方法を学ぶことの他に、他の参加メンバーが治療モデルとなることや、経験者の話を聞くことが不安の軽減に役立つということが述べられている。

子供の集団療法と並行して行われたグループには、山本・黒田・土屋・川上・宮田・工藤（1986）らの報告がある。この論文では、登校拒否をクライアント本人の自我あるいはパーソナリティの発達軸上での停滞、不均衡であり、同時に家族や学校などのシステムの機能不全、悪循環としてとらえ、児童のより総合的な発達が促進され、各種のシステム機能回復、機能増強がはかられるようなアプローチを構築することを目的としている。そこで、登校拒否児をとりまく家庭や学校、地域社会といったさまざまなレベルのシステムにおいて成長が期待されるように環境を整え、利用可能な社会資源を増強し、ユーザーのニーズあうような受け皿を用意することも重要であるとし、児童のグループ、母親グループ、コンサルテーション活動も社会資源として利用することを試みている。この研究の対象となっている児童は、個別の心理療法と並行して、これらの社会資源が利用されるという形態である。この研究の中で、母親のグループについての報告されている。そして、母親グループ等の社会資源は、治療の進展を促進するという結果が得られている。

この時期の報告の多くは、グループの実践報告の域を出ないものが多い。対象者については、対象者を母親としているものもあれば、両親共に対象となっているものもあれば、母か父かを限定せずに「親」を対象として計画しているものもある。堀之内（1985）のグループのように両親を対象としてスキル・トレーニングを応用しているグループを除いて、多くのグループでは参加者の多くは母親で、父親はほとんどいないという場合が多いようだ。

これらのグループの報告では、親自身の精神的安定や、親同士で支えあったり情報を交換したりという意義が認められている。

4) 1990年代以降

この年代にも母親のグループの実践報告は多々ある。そして、報告される内容には広がりや深まりが見られるようになった。林（1993）は、実践報告ではなく調査による研究を行なった。林が12ヶ所の親の会に参加し、その会に参加している親の中から12名の親にインタビューをし、子供が登校拒否になってからの「親の変化過程」とその過程で果たした「親の会の機能と限界」という二つの観点から考察している。12のグループの形態はそれぞれ異なっていたようである。親の変化過程に関しては、子供に対する面、親自身の内面、および家族・学校・社会に対する面の3点にわけて、それぞれ、①混乱の時期、②概念的
理解の時期、③転換の時期、④洞察の時期、⑤充実の時期の5段階に分けて説明している。親のグループの機能としては、孤立的な不幸感から解放されること、理解され受容されること、カタルシスを得ること、登校拒否等について学習すること、自分の考えを作ることができること、一人の親が出した問題について全員で解決方法を考え出すこと、他の親に自分のモデルを見ること、他の親の話に出てくる子供の姿に自分の子供のモデルをみること、人間関係を学習すること、自己理解を深めること、自分の成長が確かめられること、進路等の情報を得られること、社会的貢献感が得られることなどが述べられている。グループの限界については、本人の問題または会のあり方の問題が起因して参加者がグループから離れてしまうという問題、及び、カウンセラーが直接子供に会わないため子供が統合失調症などの場合を見逃す危険性に述べている。

また、この年代になると、父親が中心となっているグループが報告も見られるようになった。村上（1992）、藤光（1995）が報告しているグループは、その対象者が父親ということである。これらの父親グループの活動内容は、両者とも、自由な話し合いである。父親のグループにおいても、相互援助等の意義が見いだされている。

(2) 父母による相互援助グループの実践報告

専門家によって実施されたものではなく、自発的に生まれたグループがある。80年代に、いくつかのものが紹介されている。これらは、自由な話し合いだけではなく、会報の発行や体験発表を行い、地域への啓蒙活動も積極的に行っている。高松（1998）は「セルフ・ヘルプ・グループは、アカデミックな世界から遠いところで、脈々と活動を続けてきたものである」としている。

杉山（1990）は、このような親グループについて、「このようなグループは、同じような苦悩をかかえたものが、お互いに学び合い支え合うような場として存在し、専門家にできないことが、横のつながりの中では難なく果たせたりすることもある。成功しているグループには何を指すものであるにせよ、共通のプロセスと雰囲気があるようだが、この自助グループは相互援助であり、集団療法ではない。“疾患概念”や“治療者－患者関係”をもたない。医学的なモデルも教育的な相談モデルも超越しており、専門性による独占や営業性に拒否的でもある。生活者あるいは隣人として、地域側から当事者としてこの問題に取り組もうとしている」と述べている。

これまでに報告されている親たちが作り上げていったグループの形態や活動内容は、表2のとおりである。また、グループの設立の経緯や、参加メンバーの声を以下に記述する。

島根県の「グループ PiPiPi」は、1992年頃、登校拒否児（者）の援助のために自治体が設置している適応指導教室にも行けないという子どもをもつ親が集まって、話をするようになったのがはじまりである。初期のうちは喫茶店で話をしたり、その都度会場を借りたりしていたようである。1994年に、この親達を中心となって、講師を呼んで登校拒否の講演会を開催する計画が持ち上がり、この集まりを会として形づくる必要が生じ、親の会のグループ PiPiPi が誕生した。1994年7月から1年間に5号の会報も出した。1995年には、計画されていた講演会も実施した。以後、例会は月に1回のペースで、開催されている。5～10名の参加者であることが多い。メンバーは固定されているものではない。1990年代後半には、例会の他に、メンバーら親子でボーリングやキャンプといったレクリエーションが持たれることも多かった。1990年代の終わりごろになると、親たちは子供への対応や理解の仕方もあるようになり、親の会も「もうこれぐらいでいいか」という時期に差し掛かるようになった。その頃、新たに入るメンバーもいたため、平成11年4月には新メンバーの一人が会の代表者となり、新しいメンバーが中心となっていった。世代交代され、現在は初期のメンバーが会に参加することは少なくなり、新たなメンバーを中心として、月に1回の例会を持っている。

「あゆみの会」（西條 1988）は、親同士が励まし合うことから始まった会であり、現在では会員数は500家族を超え、会報を発行したり、社会啓発活動を行ったりと、積極的な活動を行っている。西條（1988）は、親の会の活動を通じて、親がわが子の登校拒否問題に関わっていくプロセスを、①わが子に異変が起きたことについての気づき、②それを登校

表1 心理臨床家・医師によるグループの実施報告

報告者 報告年 発表形式	スタッフ	対象者	形態・活動内容	グループの目的及び 意義・効果
真下 1967 論文	ソーシャル ワーカー(報 告者)。 看護職員が参 加することも あった。	入院中の登校拒否児 (者)の親5名から8名。	毎週。 患児が、主治医と結びつ きがついたときに、その グループの中に入れ、他 両親をも含め接触の場を 持たせ、話し合いや集団 リクリエーションなどを 通じて、両親と患児との 精神的距離の間合いを経 験させる。	①両親の未熟な性格傾向 の改善。 ②不安の克服。 ③家庭内葛藤の軽減除去。 ④家族成因のおのおのの 役割の発見。 ⑤患児との関係の調整。
山崎ら 1971 論文	2名。 (報告者)	集団遊戯療法を行って いる小学生女子の母親 5名	子供のグループと並行し て行われた。子供のグ ループと同じスタッフが 母親グループのリー ダー。リーダーが終始同 席することは不可能で あった。自由な話し合い の場であった。	①積極的な相互の心理的 な支持の場になり得た。 ②登校拒否の発症の動機 やその経過、その取り扱 いについて学習。
光岡 1976 論文	1名。 (報告者)	ある相談機関に申し込 まれた事例のうち、① 登校拒否の高校生の親 で、グループに相当で あると判断された者、 ②個人面接があまりす すんでいない者、等の 基準を満たす者5名。 毎回の参加者は0～4 名であった。	毎週。1回1時間30分。 当初は3ヶ月間を予定し ていたが、その後3ヶ月 延長することになり、あ わせて6ヶ月間、計18回 行なわれた。治療者がグ ループの中心の立場に立 ち、その場に自由に出さ れる母親たちの情緒的問 題や子ども達との関係、 メンバー相互や治療者へ の転移関係等を明確化し 掘り下げた。	①子どもの気持ちにそっ て考えて行こうとする態 度が見られるようになる。 ②自己の感情に則して動 けるようになる。
安部 1984 論文	1名。 (報告者)	中学2、3年生の母親 5名。母親のみが来談 している長期化した登 校拒否ケースに対して 呼びかけを行った。こ れに対して参加希望を した5名である。	毎週。1回1～2時間。 10回で1区切りとしてい たが、メンバーの希望に より延長を繰り返し、合 計30回行われた。 クローズド・グループ。 家族の参加は自由。後半 に父親と子供が参加した。	悩みを分け持つ仲間の発 見等。
藤沢 1985 学会発表	1名。 (報告者)	母親。初めは、報告者 が担当する事例が中心 であったが、後には他 の面接者から紹介の事 例もある。1回7、8 名が参加。	隔週。1回90分。 オープン・システムのグ ループ・カウンセリング。 グループには、①苦悩・ 不安の共有、②問題解決 方法の共同探索、③親自 身の人格変容、の3目的 について説明。	①母親の精神的安定に伴 う家庭内力動の変化。 ②適切な情報の交換。 ③(相談施設への来所を 拒否していた)子供の来 所が促進される。 ④役割行動により自己の 問題に直面できる。
堀之内 1985 論文	報告者と共同 治療者	一つのグループは報告 者の心理治療を受けて いる者に会報を渡し、 自主的に参加を決めた 9組の夫婦。もう一つ	月に1回。1回3時間 半。 オープン・スタイル。 体験学習(呼吸を合わせ る、能動的聴き方、ロー	①子供への具体的対応方 法の提供。 ②参加メンバーが治療モ デルとなり得る。 ③専門家の数が多くない

		のグループは、新聞等の呼びかけに応じた5組の夫婦。	ル・プレイ) や、家庭・私を知るための心理学的テスト、餅つき会や家庭菜園での種蒔きといった家族参加のレクリエーション等のプログラム。	施設での、効果的・効率的援助となる。 ④父親の治療参加を高める。
米良 1985 学会発表		母親を中心に10数名。	月に1回。1回2時間。自由討論。	①相互に支え合う。 ②第三者的見方ができる。 ③子供に接する態度にゆとりが出てくる。
田畑 1986 論文	相談員2名。 (報告者と補助員。補助員は教員経験のある女性。)	小中学生の親20名。「親の教育相談『お知らせ』」のチラシにより、参加者を募集。毎週。1回2時間。合計6回。	クローズド・グループ。研究を兼ねたグループであった。エンカウンター・グループの応用。7回目には、精神科医の講演を受講して終了となる。	初回頃、不安そうで枯れたような表情の母親が、終わり頃には落ち着き、内面的にも充実してきた。
山本ら 1986 論文	1、2名。	母親。	隔週。1回2時間。オープン・システム。フリー・トーキング中心のグループ・カウンセリング。	①母親の不安や焦りを共有できる場であった。 ②他者の経験を参考にすることで、ある程度の見通しが立てられるようになった。 ③他者との相互作用により、「登校拒否」、親、子、家に対する気づき、洞察が深まった。
米良 1986 学会発表		10数名の母親。	1985年の報告の、その後の経過。	
星野 1988 論文	精神科医、心理療法士、教師、看護婦。司会は医師。	報告者らの勤務する病院に通院または入院をしている登校拒否児の家族。1回10～15名が参加。	月に1回。家族の出席者全員に、子供に関する悩みや疑問点などについて発言してもらい、スタッフや他の家族がそれに対して助言を与える。	親が洞察を深めたり、心理的に変容したりする。
村上 1992 学会発表	1名。	父親。1回6名前後が参加	月に1回。1回2時間。オープン・グループ。エンカウンター・グループのやり方を踏襲。自由な話し合いの形。	①各々経験や悩みを出し合いながら、お互いが自らを振り返ったり支え合う。 ②家族のことをじっくり考え直す機会。 ③孤立感からの脱却。
小野 1993 論文 小野 2000 著書 多くの経験を元に記載。		ファシリテーターを含めて12、3名が適当であるが、二人でも可能。多くても15名ぐらいまで。	あらかじめ話題を決めない自由な話し合いを中心に過ごす。クローズド・システムの場合、何セッションかの一期が終わるまでは新メンバーの参加は認めない。主として、小・中学生の親を対象としている。オープン・システムの場合、区切りは設けず、出席も中断も自由としている。主として高校生を親を対象としている。両者とも月に2回のペースで行なうことが多い。	①心理的安定が得られる。 ②親が変化をする ③情報交換ができる。

<p>安達 1995 論文</p>	<p>セラピスト1名。 アシスタント1名。</p>	<p>母親。 前期12名。後期13名。</p>	<p>月に1回。1回1時間半。 半年で1クール。実施回数5～6回。前期、後期の2回実施。 クローズド・グループ。 初回に、①参加者自身は何をどのように変えていきたいか、②子供との関わりについて、何をどのように変えていきたいか、の目標を各メンバーに表明させる。2回目以降は、自由な発言を促す。</p>	
<p>藤光 1995 論文</p>	<p>世話人は、カウンセラーである報告者が父親の一人として参加。</p>	<p>父親。実人員29名。 延べ88名。 1回平均7名。</p>	<p>月に1回。1回2時間。 オープン・グループ。 自由な話し合いの形式。</p>	<p>情報交換と相互援助の場の提供。</p>
<p>川名 1998 論述</p>		<p>参加者数は延べ122名であった。うち父親12名、母親107名、祖母1名、子供(本人)2名であった。参加メンバーは始めのうちは流動的であったが、徐々に固定していった。</p>	<p>品川区により、平成8年8月から平成10年3月までに9回開催された。子供への対応や理解の仕方等の相談に応じたり、参加者が相互に悩みや経験を語り合ったりする。</p>	<p>精神的な負担を少しでも軽減することを願って運営された。</p>
<p>中尾 1998 論述</p>	<p>登校拒否担当教諭と養護教諭。希望によりカウンセラーなど。</p>	<p>登校できない生徒の保護者・親権者。</p>	<p>月に1回。1回2時間。 月により、子供が登校拒否となったことのある母親の体験談を聞いたり、ビデオを視聴したり、感性を高めるためのトレーニングを行ったりとのプログラムが準備されている。これに加えて、毎回自由な話し合いの場が持たれている。</p>	<p>参加者は、子供へのかかわり方が反省できたり、仲間といるという安心感が持てると話している。</p>
<p>伊藤 2000 論文</p>	<p>4人のファシリテーター(5人のスタッフ)</p>	<p>不登校で悩む保護者や教師。10～20名の参加となることが多い。</p>	<p>例会を月に1回以上開催。机を取り払った会場で、保護者・教師が輪になって椅子に座り進行していく。あらかじめ与えられるテーマはなく、「不登校について一緒に考えていきましょう」ということが決められているだけである。特別企画として講演会を実施することもある。また会報を発行している。</p>	<p>基本理念として、 ①不登校に関わる人たちが率直に話し合い、支えあう場とする、 ②不登校に関する学びの場を提供する、 の2点が掲げられている。</p>

表2 父母による相互援助グループの実施報告

名称	グループ PiPiPi
設立の経緯	登校拒否児（者）のための適応指導教室に行くことを「拒否」した子どもの親たちが、集まって話すようになった。その親たちが中心となって登校拒否の講演会を開くことになり、親たちの集まりを会として形成する必要性が生じ、1994年に「グループ PiPiPi」と名づけたのが始まりである。
会員数	
活動内容	自由参加型で、毎月の例会には5～10名が参加することが多いようである。 月例会の開催。講演会の企画・実施。 2003年に筆者が本会代表者らから聴取した情報より
名称	かめの会
設立の経緯	最初は県の精神保健センターで継続面接を行っていた思春期の子供をもつ親を対象とした「思春期親の会」として発足した。参加者のほとんどが不登校を問題として参加していた。また、最初のうちは、センターのスタッフがイニシアチブをとって実施されていた。会を重ねるうちに相互支援的な色彩が徐々に出てきて、スタッフの介入も少なくなっていった。そして、約1年が経過した頃に、自助グループ「かめの会」として独立した。
活動内容	お互いの体験談を語り合いながら相互支援していく場として、月に2回の例会を中心に研修会の開催や一般社会に対する広報啓発活動、あるいは会報「かめ」の発行などを行なっている。 久保・西村（1993）より引用
名称	登校拒否を克服する会
設立の経緯	1986年に大阪教職員組合の「親と子の教育相談室」で面談を受けていた親たちへの呼びかけにより誕生した。
会員数	1986年の第1回の参加者は28名だったが、1990年頃の第27回では200名近くの参加者があった。
活動内容	二ヶ月に1回の割合で交流会を持ち、専門家の講演や、親の本人の体験談を聞く。その後、初めて参加した人のための「基礎講座」や、父親教室などに分かれて交流会を持つ。財政面は、大阪教職員組合からの援助や、カンパと書籍やパンフレットの販売の収益でまかなっている。
意義・効果	①孤独感から解放され、親が落ち着く ②親同士の相互援助で相談室の指導が定着する ③親たちの連帯と仲間作りができる ④学校・家庭・相談員の三者の連携を作りやすくなる 松居（1990）及び松本（2001）より引用
名称	あゆみの会
設立の経緯	登校拒否児の親が励まし合うことから、自然発生的に成立。
会員数	約500家族。公開会合等の特別会員を含めると1000会員以上。
活動内容	会報の発行。月例会等の開催。個人相談の実施。社会啓蒙活動。母親合宿、子ども合宿の実施。 西條（1988）より引用
名称	希望会
設立の経緯	1971年に国府台病院で、集団カウンセリングの場として始まる。2年ぐらいてからは、自立的な会として進む。
活動内容	登校拒否児の親の悩みや不安、かけている問題などを率直に出し合い、経験交流や意見交換をする。 会報の発行。 奥地（1987）より引用
名称	登校拒否を考える会
設立の経緯	希望会は国府台病院を受診していないと入会できなかったため、病院に関係なく、入りたい人はだれでも入れるような会が必要となった。
会員数	8名で始まる。2年半で450名を越える。
活動内容	月例会。講演会や体験発表の場を企画。 竹下（1983）より引用

拒否と認めることについての葛藤、③自分でなんとか現状打開しようとする努力、④他者あるいは自分に対する怒りと不当感、⑤登校拒否で悩んでいるのは自分だけではないという気づき、⑥登校拒否問題への真剣な取り組みと将来への希望、⑦人生をより高い次元で考えられるようになったことへの感謝、⑧それらの喜びや感謝を社会に還元していくための努力、と記述している。親の会の意義の意義の一つとして、いかに登校拒否や子育ての問題の本質を理解し自分のものにしていけるかという点をあげている。

「希望会」に参加していた竹下(1983)は、「こんなにおおぜいの人たちが同じ苦勞をしているとは考えてもいませんでした。会にはじめて出席したとき、会員のかたから『わが子を信じなさい。かならず芽のどるときがありますから』といわれましたが、このことばはいまでも心のなかに生きつづけております」と記している。同じく「希望会」に参加していた奥地(1987)は、「こんなに真実を出し合い、本音を語る会というのに出会ったことがなかった。」「参加者はみんな、わが子の生涯にかかわる問題を真剣に探求しようとしている。」「親のあり方をはっきり批判したり、励ましたり、古い方と新しい方がいっしょになって経験を出しあって、意見交換をしていた。」「私は、そこで、人間とはどういうものかを徹底して学んだように思う。」と述べている。これらは、参加する親の率直な感想であり、数少ない親の側からの報告である。

大阪の「登校拒否を克服する会」については、松居(1990)と松本(2001)がそれぞれ記している。この会は、専門家の呼びかけで始まったグループではあるが、運営状況は父母らによるグループとして考えられる。会員は、不登校で悩む保護者や教師である。松本(2001)は、グループの役割を、大阪「登校拒否を克服する会」の参加者への質問紙調査を実施し、統計的手法をもちいて検討している。親の会の機能については、親自身の安定や、社会的孤立感からの解放、「不登校」に関する認識の深化等をあげている。さらに、グループは「家族の対処能力の限界性を補完する機能を担うものとして位置付けられる」と述べている。また、別のアンケートも実施している。その質問内容は、会に望むこと、参加して好ましく感じられたこと、参加して好ましくないと感じられたこと、であった。好ましくないと感じられたことについては、プライバシーが守られているかどうかの不安があること、どうしたら学校に行かせることができるかということを中心に会が進められているような気がする、自分の意見が言いにくく学校の批判もできない、などがあげられている。

(3) 理論的考察に主眼をおいた研究報告

1990年代頃から、理論的考察に主眼をおいた研究報告も見られるようになった。主だったものの1つに、小野(1993, 2000)の報告がある。この報告では、グループの効果のみにとどまらず、数多くのグループ経験から得られた親の変化過程仮説が提唱されている。これは、小野の15年以上にわたる親のグループの経験を元にしたものである。方法は完全フリー・トーキングのエンカウンター・グループの応用である。親の変化過程仮説については次の8段階である。Ⅰ. 不安混乱期。子供の不登校状態が全く理解できず、対応策も全くないという困惑と今後の不安にとらわれている。Ⅱ. 責任回避期。不登校の原因を考え始めるが、それを他に求めて、さまざまな形の学校批判、学校への要求、家族への非難、親自身の責任回避、本人の責任追及がみられる。Ⅲ. 模索期。解決を考え始めるが、それ

はほとんどが解決につながる方向のものではない。Ⅳ．解決方向探索期。真に解決につながる見方や行動が可能になる。Ⅴ．方法探索期。効果のなかった方法の整理から始まり、具体的な改善・解決方法を考え、実行に移していく。Ⅵ．変化期。親の自己洞察が始まり、変化を自己確認できる。Ⅶ．問題の積極的受容期。この問題の生じたことを、親の変革の必要性を子供が気づかせてくれた、良い体験・学習・気づきとして、積極的に受容できる。Ⅷ．親自身の成長期。親自身の問題が認識され、解決をはかろうとする。夫婦関係の改善、依存性からの脱却—自立、嫁姑関係改善が中心テーマとなり、改善努力が始まる。そして、小野はこの仮説について「臨床家には親の変化の見通しを得るために、親達には自分がどう変化すべきかを知るために有用である」と述べている。

2. 考察

(1) 親グループの報告の変遷

登校拒否は、日本では1950年代頃から着目されはじめ、1960年頃から研究は増加した。しかし、親のグループの報告は、1970年代でも少なかった。1970年代までに報告されたグループの参加者は、自発的に集まった者ではなく、入院している子どもの親たちであったり集団療法に参加している子供の親たちであったりした。1960年代から70年代では、「登校拒否」という言葉は現在ほどには知られていなかったために、親たちが、自分のためではなく子どもの登校拒否を考えるためにグループに自発的に参加するのは、困難であったようだ。

80年代になり、報告は増加した。実践報告が中心で、自主的に参加する者によるグループが増えている。スキル・トレーニングを応用したものもある。そして、グループが親にとって有効であることが強調されている。同じ苦悩を持つ人々を知ること、親たちは大きな安心感を得る。同じ苦悩をもつ仲間の中でこそ、悩みを打ち明けられるという場合は多いだろう。グループは情報交換の場でもある。こういうグループの中であるからこそ、親たちは、様々な感情を表現したり、多くの気づきを得たり、子どもへの対応の仕方を学んだりすることができるようだ。また80年代には、社会への啓蒙活動を行っているグループも報告されるようになった。80年代のグループの特長は、人々に登校拒否という現象が知られるようになっていったことが大きく影響していると考えられる。この時期は、登校拒否や親のグループが人々に知られ始め、グループのあり方が模索されていた時代であると言える。

この1990年代には、父親が中心のグループの報告があったり、まとまった仮説が提唱されたりと、グループの内容や研究に広がりが出てきた。そして、どの報告においても、グループが親にとって有効であることが強調されている。

また、90年代頃からは、理論的考察に主眼をおいた論文も見られるようになってきた。親のグループが広く知られるようになるにつれグループの効果も知られるようになり、グループに関する報告は実践報告だけでは不十分となり、研究に深まりが出るようになり、理論的考察に主眼が置かれるようになってきたと考えられる。小野（1993）の論文では、親のグループの取り組みをとおして見いだされた親の変化過程仮説が提唱されている。これは、著者の長年にわたる取り組みと研究から生まれたものであり、はじめてのまとまった仮説である。

(2)親グループ及び先行研究の意義と問題点

意義として、ほとんどの報告や論文で、グループは、親同士の仲間作りや孤立感からの解放、情報交換の場としての機能、登校拒否問題や子供への対応等の学習といった効果が強調されている。しかし、その一方で、それが子供にどのように反映されているか、子供のその後の状態にどのような影響を与えているかについての言及は、不十分である。親のグループを通して親が変化するとと言われることが多いのだが、その親の変化と子どもの成長との関連を明確にしていくことは有用なことである。

また、意義は専門家やスタッフの立場からみたものが述べられているものが多いが、専門家が加わらないグループの報告は少ない。これは、専門家ではない親たちが、グループの取り組みを文章化して報告する機会が多くはないからだろう。このような中で、親によるグループの報告には、竹下(1983)、奥地(1987)、西條(1988)、久保・西村(1993)などがある。これらの親の側からの報告は希少なものである。ここで述べられているように、父母によるグループも、専門家によるグループと同様の相互援助的な意義が認められる。

ところで、これまでの報告には、グループのもつ危険性への言及はない。だが、グループの中で多くの人の意見を聞いたり、また自分の内面を深く見つめなおしたりという作業は、心理的に負担の大きいことである。また、グループというのは、メンバーたちが攻撃的になったり、メンバーでスケープゴートになる者が生じたりする危険性が存在する。グループの中で、重大な心理的損傷を負う者が生じる危険性は否定しきれない。村山(1999: 227-228)はエンカウンターグループに関しての記述の中で、「心理的損傷とは『グループに参加した後、重大な心理的障害が発生し、しかもこれがグループ経験にもとづくものと考えられる』場合を指している」と述べ、エンカウンターグループ体験後に、躁状態になった事例や、グループ体験で傷つき約6ヶ月入院した事例があることも述べている。親のグループは、エンカウンターグループを応用したやり方で実施されている場合は多く、同様の危険性は親のグループで生じ得るだろう。グループの危険性を無視してはならない。また、親のグループを安易な考えで取り組んではならない。

さらに、もう一つの問題点として秘密の保持についての問題がある。伊藤(2000: 280)の、グループの参加者へのアンケート結果に、「プライバシーがきっちりと守られているかどうか不安に感じる」というものがある。グループというのは、スタッフを含めたメンバーの辛さやしんどさを共有する機能も有している。あるメンバーのしんどさを共有した他のメンバーが、その秘密を保持するのは、心理的な負担は大きいと言える。また、秘密保持の重要性を全メンバーに強く認識させることも、また容易なことではない。プライバシーの保護については、これまで以上に強調せねばならないだろう。

他には、林(1993)が指摘している点であるが、グループを通して登校拒否問題や子どもの理解を深めようとするとき、グループのスタッフやメンバーが子どもに会わない場合が多いので、子どもが統合失調症など病的な状態であった場合に、それを見逃す危険性もある。

先行研究では、上述の危険性に加えて、危険性の指摘が少ないこと自体も問題点である。今後の研究では、グループの危険性についても検討される必要があり、それは今後さらに慎重に考えるべき問題である。

(3)親グループの研究の今後の方向性

いくつもの、学会発表や論文が提出されているが、実践の報告の域を出ていないものが多い。それらの報告では、グループの実施方法や活動内容を紹介し、その効果について言及するというものである。これからは、実践の報告だけでは研究としては不十分であり、理論化が必要である。たとえば、山本ら（1986）の研究は、単なる実践報告ではなく、児童の総合的な発達を促進され、各種のシステムの機能回復、機能増強がはかれるようなアプローチを構築することを目的としている。山本らは、さらに多くのケースについて、グループ指導の有効性および有効であることの内容をより明確にしていきたいと述べ、研究の発展の可能性が示唆されている。

今後の親グループの研究は、一つのグループの実践報告にとどまらず、多くのケースに見られる普遍的な事柄を明確にしていくことや、様々な側面からの理論構築が重要となってくる。今後、親グループに関する研究はさらなる発展が期待される分野である。

謝辞

査読者から貴重なコメントをいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

参考文献

- 安部恒久 1984 「登校拒否児をもつ母親へのグループ・アプローチ」『人間性心理学研究』2: 110-120。
- 安達映子 1995 「母親グループコミュニケーションの集団内変化」家族療法研究会（編）『不登校児家族のサポートに関する臨床的研究』伊藤忠記念財団平成5年度調査研究報告書：38-47。
- 藤光純一郎 1995 「父親グループ—悲しみと不安の社会化」家族療法研究会（編）『不登校児家族のサポートに関する臨床的研究』伊藤忠記念財団平成5年度調査研究報告書：48-60。
- 藤沢敏幸 1985 「来所を拒否する思春期登校拒否児への治療的接近—母親のグループカウンセリング」日本心理臨床学会第4回発表論文集、78-79。
- 林 知義 1993 「「登校拒否児の親の会」の意義—親の変化を中心に—」『鳴門生徒指導研究』3: 33-46。
- 星野仁彦・渡辺 実・八島祐子・熊代 永 1988 「登校拒否症に対する集団家族療法（家族会）の試み」『小児の精神と神経』28(4): 275-281。
- 堀之内高久 1985 「複合夫婦療法を併用した登校拒否家族治療の試み」日本家族心理学研究会（編）『家族カウンセリングの実際』家族心理学年報 3: 193-218。
- 伊藤 隆 2000 「「不登校を考える会」について—保護者と教師の集まり—」『日本私学教育研究所紀要』35(1): 273-290。
- Johanson, A. M., Eugene, I. F., Szurek, S. A., & Margaret Sevensen. 1941 School phobia. *Am. J. Orthopsychiat.*, 11: 702-711。
- 久保 武・西村秀明 1993 『不登校の再検討』教育史料出版会。
- 真下 弘 1967 「登校拒否児の家族治療の経験」医療 21(2): 28-31。
- 松居公子 1990 「親たちの育ちあいと教育相談—「登校拒否を克服する会」の活動について—」教育 40(10): 15-23。
- 松本訓枝 2001 「「不登校」児家族の変容とセルフヘルプ・グループの役割（第1報）—「親の会」参加後の子どもと親の変化の実態—」生徒指導研究 18: 138-157。
- 光岡征夫 1976 「登校拒否（高校生）をもつ母親のグループ治療過程に関する研究」山口大学教育学部紀要 10: 187-204。

- 村上昭史 1992「不登校児の父親グループについて」『日本心理臨床学会第11回大会発表論文集』: 280-281。
- 村山正治 1999「エンカウンターグループ」上里一郎・鎌幹八郎・前田重治編集『臨床心理学大系 8巻心理療法2』金子書房。
- 中尾清美 1998「登校できない生徒の親の会の試み」『月刊学校教育研究』3月号: 49-50。
- 奥地圭子 1987「わが子の登校拒否が私を変えた」登校拒否を考える会(編)『学校に行かない子どもたち』: 13-54、教育史料出版会。
- 小野 修 1984「登校拒否の親の変化過程」『中四国心理学会発表論文集』17: 62。
- 小野 修 1988「問題をもつ子どもの親達のグループ—臨床家のためのマニュアル」『人間関係研究会資料』11。
- 小野 修 1993「不登校児の親の変化過程仮説」『心理臨床学研究』10(3): 17-27。
- 小野 修 2000『子どもと共に成長する不登校児の「親のグループ」』黎明書房。
- 西條隆繁 1988「父母の会としての取り組み」『現代のエスプリ』250: 132-141。
- 佐藤修策 1959「神経症的登校拒否行動の研究—ケース分析による—」『岡山県中央児童相談所紀要』4: 1-15。
- 杉浦康夫・高木敬三・伊達雅子・大岡朝子・野々村説子 1987「家族会を通してみた不登校生—20年前との比較」『社会精神医学』10(2): 154。
- 杉山信作 1990『登校拒否と家庭内暴力』新興医学出版。
- 田畑 治 1986「親の“グループ”による面接教育相談を通して」『行動療法研究』11(2): 16-20。
- 高松 里 1988「日本の SELF-HELP GROUP に関する文献リスト—1987年度—」『九州大学心理臨床研究』7: 139-145。
- 竹下ミドリ 1983「登校拒否児の親をささえた希望会の十年」渡辺 位(編著)『学校に行かないで生きる』太郎次郎社: 257-269。
- 山本和郎・黒田浩司・土屋満明・川上ひろみ・宮田 徹・工藤 剛 1986「登校拒否児童の総合的発達促進のためのグループ指導の実践とその治療効果—Competency Model にもとづいた治療モデルの展開—」『安田生命社会事業団研究助成論文集』22(2): 168-183。
- 山崎道子・井元美智子 1971「学校恐怖症児に対する個別介入と集団処遇統合の試み」『精神衛生研究』19: 93-116。
- 米良哲美・田幡陽子・渡辺澄子・岩尾芳郎・光宗勝繁・中澤恒幸 1985「不登校の家族会の試み」『社会精神医学』8(3): 215。
- 米良哲美・光宗勝繁・田中孝雄・中澤恒幸 1985「不登校の家族会の試み(第2報)」『社会精神医学』9(3): 254。

キーワード: 登校拒否 親 相互援助グループ セルフ・ヘルプ・グループ 親の会

(KAWANAKA Junko)